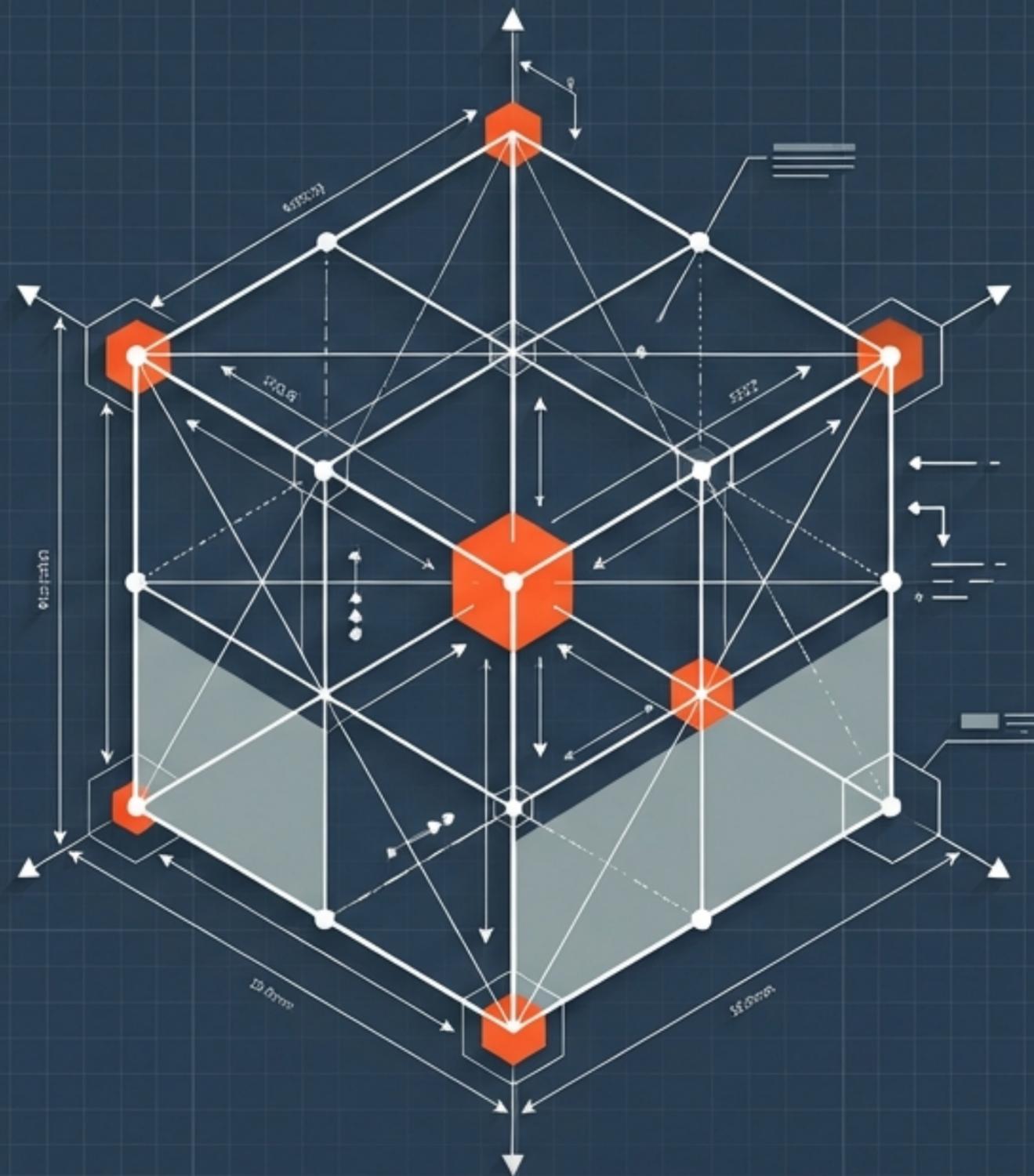


プロジェクト原価管理： 実際原価と予定原価

正確さとスピードを両立する計算メカニズム
(Chapter 4 Guide)



原価計算は「実際原価」と「標準原価」の2つに大別されます。

実際原価計算 (Actual Cost Accounting)



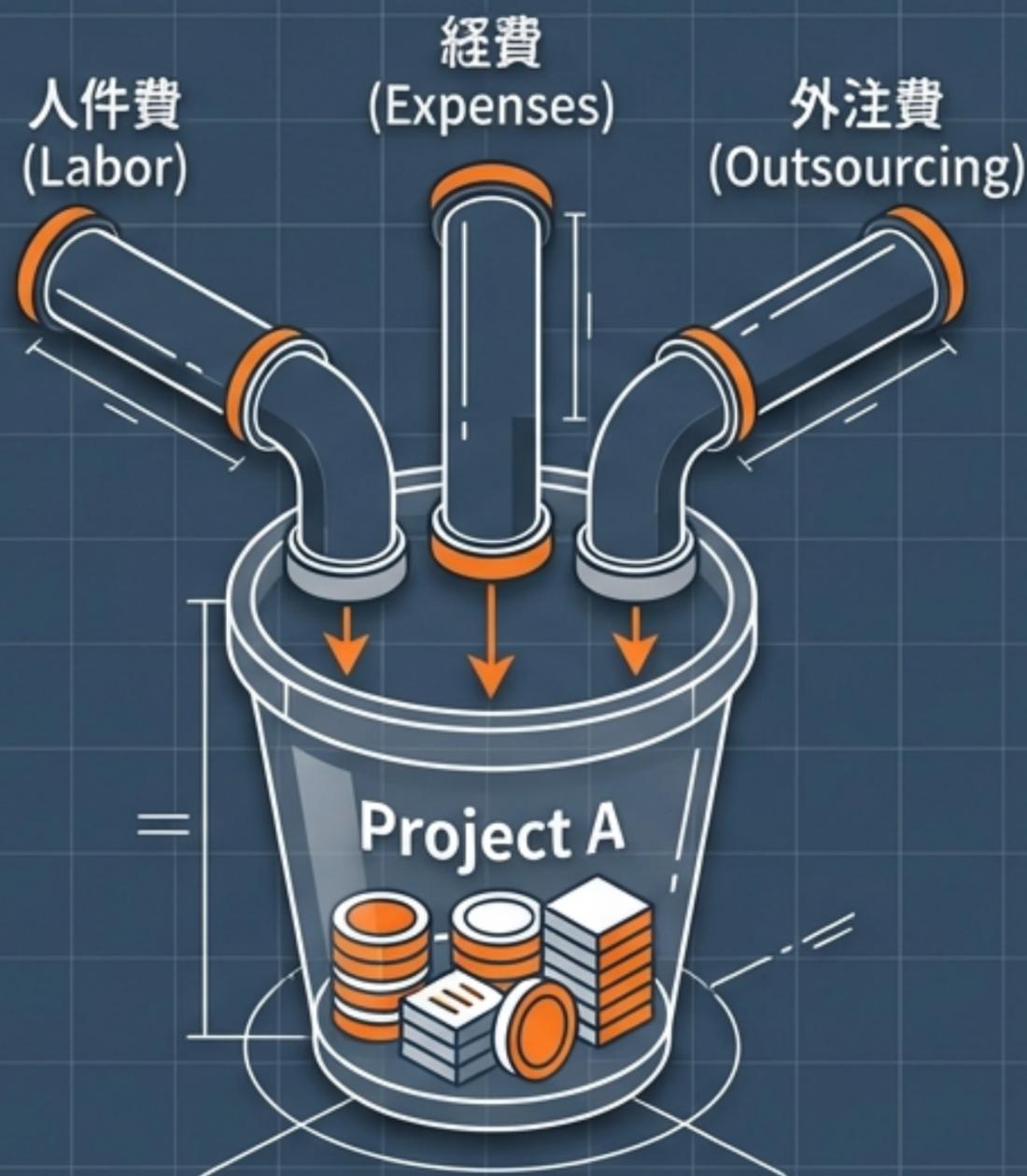
過去の実績データに基づく集計。
プロジェクト別原価計算はここに分類される。

標準原価計算 (Standard Cost Accounting)



科学的・統計的な目標値。
大量生産（総合原価計算）向け。

実際原価計算の基本メカニズム

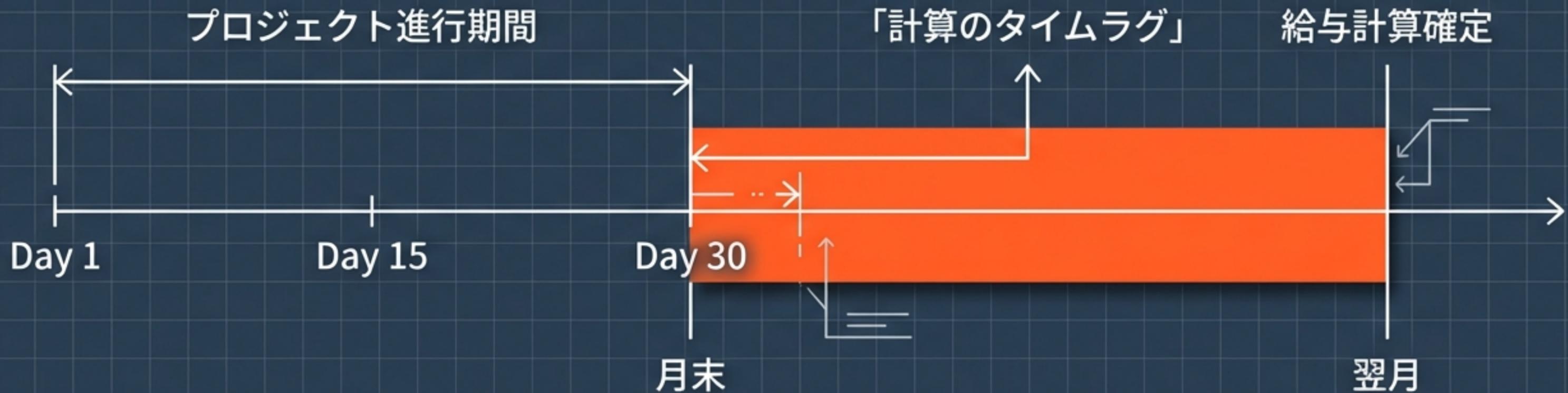


$$\text{実際単価} \times \text{実際消費量} = \text{実際原価}$$

プロジェクト別原価計算では、実際に発生した費用をプロジェクトごとに直課・配賦し集計します。完了した作業の実績に基づくため、最も確実なデータとなります。

実際原価の弱点：データの遅れ

給与総額や勤務時間は月次で締め切られるため、正確な単価が確定するのは月末以降になります。これでは、進行中の意思決定に間に合いません。



解決策：予定原価（予定賃率）の活用



$$\begin{array}{l} \text{予定賃率} \quad \times \quad \text{実際時間} \\ \text{(Predetermined Rate)} \quad \quad \quad \text{(Actual Hours)} \end{array}$$

※時間は「実際」の値を使うため、
これも実際原価計算の一種です。

あらかじめ設定した「予定賃率」を使用することで、作業完了と同時にコストを把握できます（迅速性）。

予定賃率の算出式

年間の予定総支給額

(Annual Budgeted Total Labor Cost)

年間の予定総就業時間

(Annual Budgeted Total Working Hours)



1時間当たりの

予定賃率

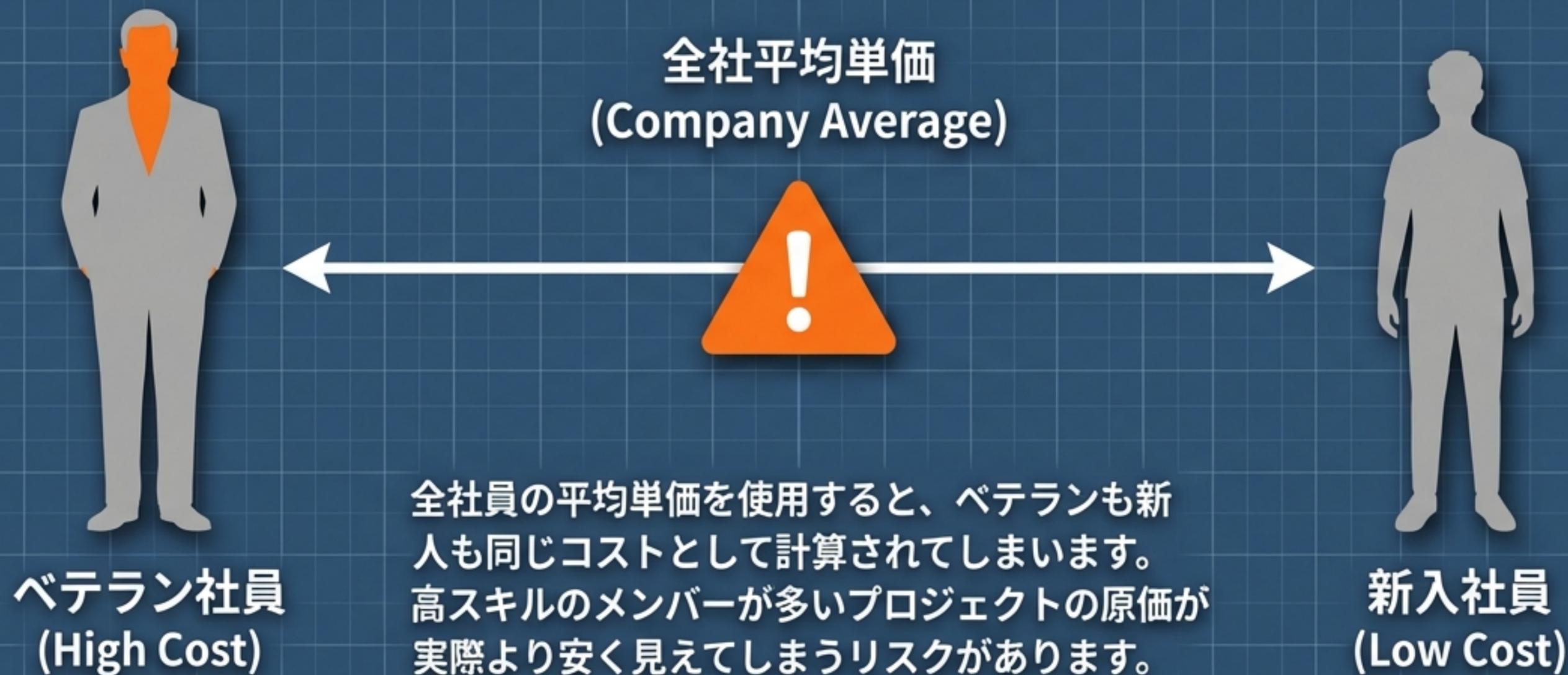
(Hourly Rate)

Technical Note

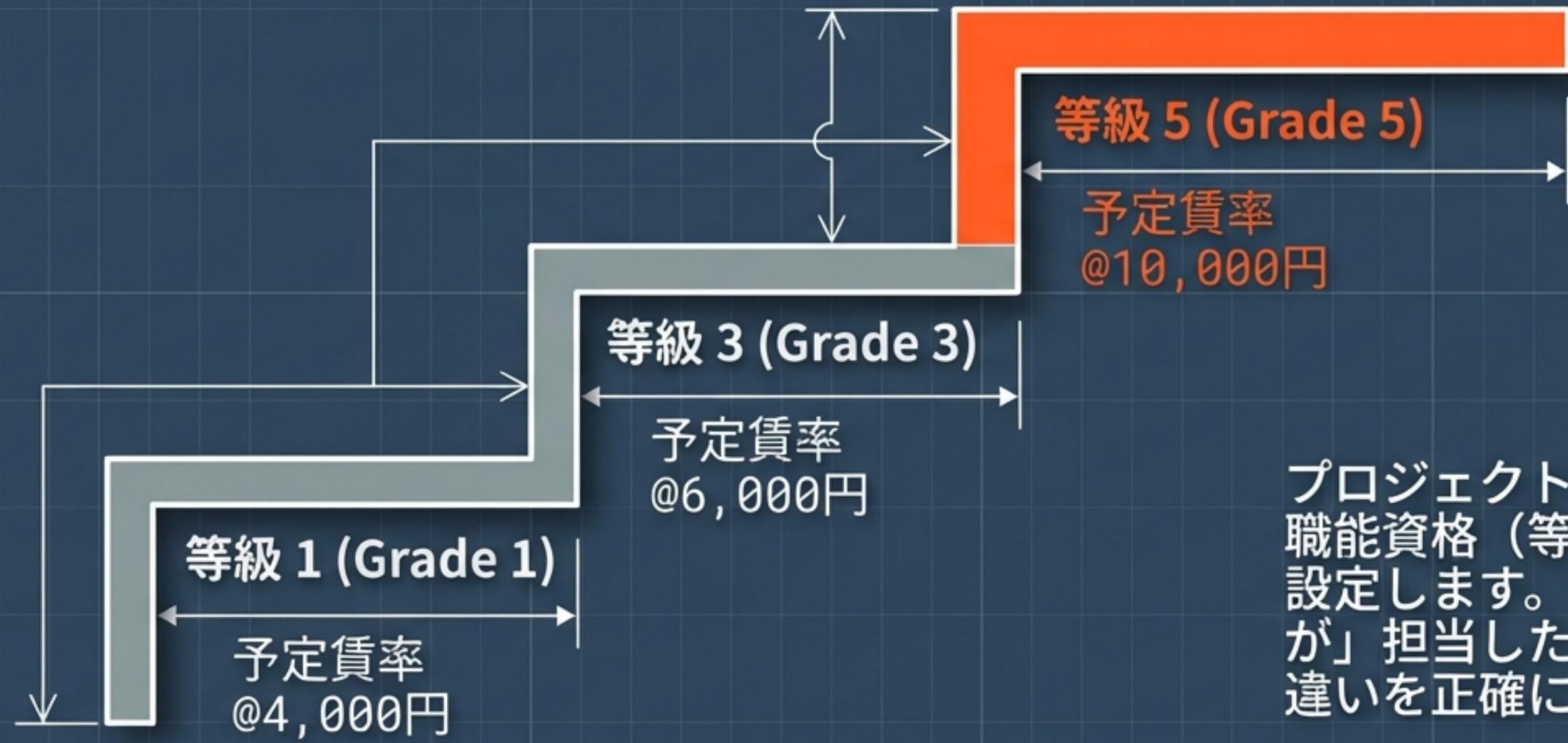
就業時間の算出例：(365日 - 休日日数) ×
1日当たりの労働時間 = **1,928時間**

1年間の予算をベースに計算することで、月ごとの稼働日数の変動によるブレを排除します。

平均の罠：一律単価の問題点

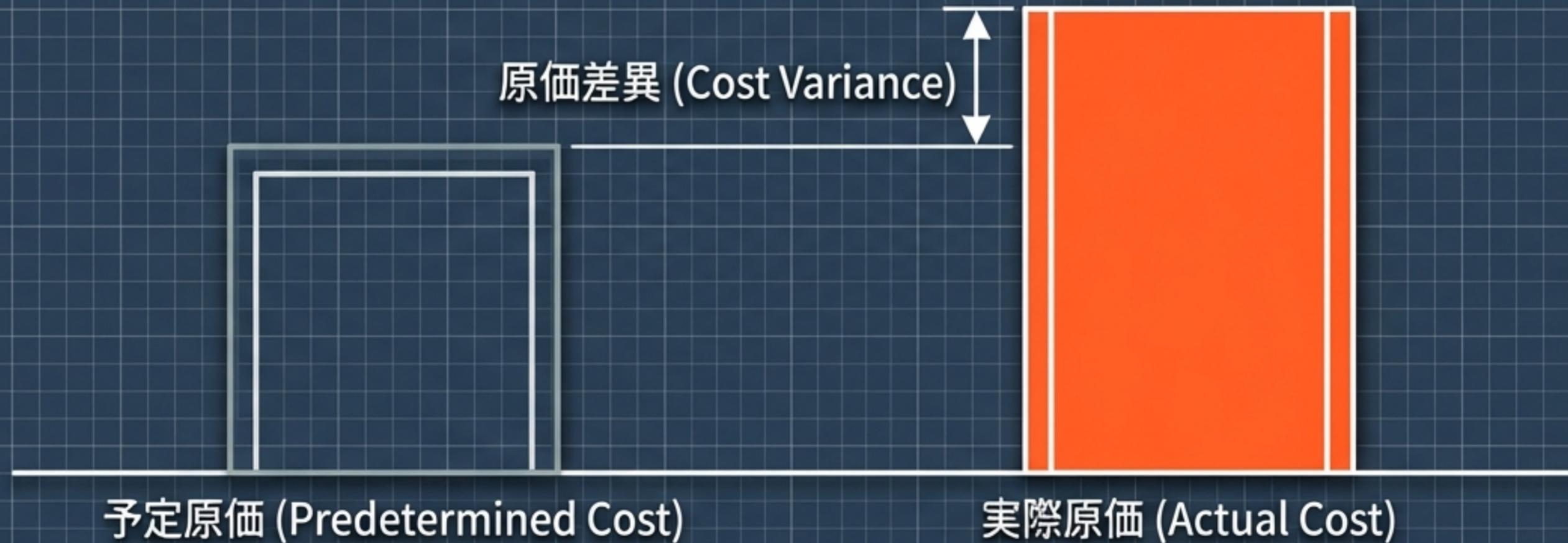


等級別予定賃率の設定



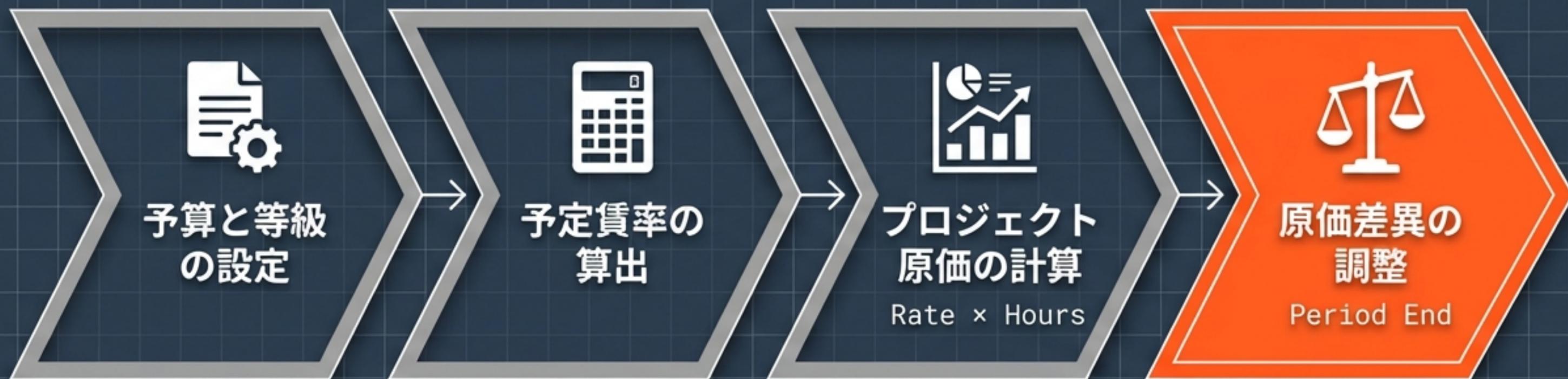
プロジェクト従事者のスキルや職能資格（等級）ごとにレートを設定します。これにより、「誰が」担当したかによるコストの違いを正確に反映できます。

原価差異の調整



予定価格と実際価格には必ず差が生じます。この差異は、会計期間の末期に調整し、最終的な帳尻を合わせる必要があります。

プロジェクト原価管理の全体フロー



スピード（予定賃率）と正確さ（等級別設定）を組み合わせることで、
実効性の高いプロジェクト管理が可能になります。